

大政奉還150周年記念プロジェクト

歴史に学び地域でつながり未来に活かす



大政奉還 卯田丹陵画 聖徳記念絵画館蔵

欧米列強の脅威が迫りつつあった幕末の日本。公家や大名、一介の武士・浪士に至るまで、立場を越えた人々が国の行く末を案じて京都に集い、熱い議論を交わして果敢に行動を起こしました。

そして迎えた慶応3(1867)年10月13日。多くの人の思いが結実し、将軍徳川慶喜は二条城で「大政奉還」の意向を表明。武家社会から近代日本へ。新時代の幕開けを迎えました。

本年は、国の在り方を変えたその歴史的転換点から150年の節目の年です。ぜひこの機会に、まちの至るところに残された幕末維新ゆかりのスポットに足を運んでみてください。時代を駆け抜けた先人たちの思いに触れられることと確信しています。



京都市長
門川 大作

慶喜は姿を見せたか？

大政奉還150周年記念プロジェクト学術顧問
佛教大学 歴史学部 歴史学科 教授

青山 忠正



慶応3(1867)年10月12日、新発田藩の京都留守居、寺田喜三郎てらだ きさぶろうのもとに、次のような回状が廻されてきた。発給者は、徳川家(幕府)の大目付戸川忠愛とがわただなる、目付設楽岩次郎しだら いわじろうの両名である。それには、「国家の大事」について、見込みを尋ねたいことがあるので、各藩とも京都詰の重役か、または事情の分かった者が、13日の正午に、二条城へ出頭するように、とあった。

この回状による諸連絡の仕組みは、以前から慣例化されたもので、回状順達の組合が組織され、ちょうど町内会で回覧板を回すように、様々な事柄が伝達されてくるのである。

喜三郎は、この召集に応じて、13日午前中に二条城に入り、ともに呼び出しを受けた相役たちと一緒に二の丸御殿の大広間へ詰めた。この時、召集を受けたのは、10万石以上の大規模大名である。該当する大名は、全国で50家あり、そのうち集まったのは42家だった。下総佐倉の堀田家や、若狭小浜の酒井家、山城淀の稲葉家、それに会津松平家、桑名松平家など

が来ていないが、彼らは家門または譜代の重鎮なので、すでに12日の段階で、将軍から状況を知らされていたはずである(上の画「大政奉還」は、その時の模様を描いたもの。場所は黒書院、居並ぶのは幕府役人たち)。

その席で、大目付戸川忠愛に引き続き、老中の板倉勝静いたくらかつきよが襖ぎわに出座して、「御書き付け3通を渡すので、見込みの趣を、腹藏なく申し上げるように。将軍が直々に御聞き遊ばされる」と通達した。そのあと、大目付の戸川と目付の設楽が、その書き付け、すなわち政権奉還の上表草案などを配布して回り、見込みを申し上げたい者は居残るようにと、指示した。大部分の者は、特に申し上げるようなことはない、として退出したが、薩摩・土佐・芸州・備前・宇和島の5藩、6人だけは居残った。6月以来、大政奉還の実現に向けて画策してきた人々であり、実際に建白を実行したのは、土佐、芸州の2藩である。

そこで振り出しに戻るようだが、42家の代表が集まった席に、将軍慶喜が姿を現したか、といえ、答えは否である。慶喜が対面したのは、居残った、薩摩の小松帯刀や土佐の後藤象二郎ら6人だけ。例外的な処遇であった。『明治天皇紀 附図』に、その模様が描かれている。

大政奉還150周年記念プロジェクト

平成29(2017)年は、武家政権が終わりを告げ、新しい国づくりへの転換期となった慶応3(1867)年の「大政奉還」から150年の節目に当たります。

京都市では、この機会を捉え、幕末維新に縁を持つ全国の21都市と相互に交流・連携を図りながら記念事業に取り組みます。

【参画都市】

京都市 会津若松市 千代田区 品川区 調布市 日野市 上田市 福井市 静岡市 桑名市 大阪市
和歌山市 高梁市 福山市 萩市 下関市 宇和島市 高知市 長崎市 熊本市 霧島市 鹿児島市



大政奉還150周年記念プロジェクト
の各都市のお知らせ・イベント情報は
WEBでも公開中！

<http://www.taiseihokan150.jp/>

大政奉還150

検索

